



北海道の歴史を紐解くとき、間宮林蔵と伊能忠敬をおいて語ることはできない。

間宮林蔵（吉村昭著「間宮林蔵」令和3年5月）と伊能忠敬（井上ひさし著「4千万の男」令和3年5月、HP掲載）。間宮林蔵は天文学にも詳しくかったので、北海道、国後、エトロフの沿岸の測量をした。のちに伊能忠敬の蝦夷地測量と一緒にして「伊能・間宮図」となり、北海道の輪郭はほぼ正確な形で明らかになった。しかし、道内の模様について明らかにした功労があった人々について紹介したい。

参考にしたのは民族学者でもある宮本常一著「辺境を歩いた人々」河出新書房である。

近藤重蔵



近藤重蔵は明和8年（1771）江戸、町与力の次男として生まれた。重蔵は幼い頃から神童と言われたが、父親の後を継ぎ与力となった。しかし、一生与力で終わる人物ではなく、学問に励み武術も練った。24歳のとき、湯島の聖堂で学術の試験を受け最優等の成績を挙げ注目され、重用されるようになっていた。当時、幕府は中国、オランダとの交易を認めていたが、日本の近海にはクジラを追ってイギリス、アメリカの船が東北地方から北海道近辺には集まり、またロシア人がラッコを追って、カムチャッカから千島

に沿って南下していた。ロシアは必需品の補給のため日本との通商を望み、安永8年（1779）、日本との通商を申し込んできた。そのころ、日本人もようやく北海道東海岸辺りまで出かけるようになりアイヌと交易していた。そしてアイヌは日本人から買った品物を千島の島々に売っていた。千島のアイヌとは顔つきが違った赤蝦夷と呼ばれる人がいた。このことに気が付いた仙台の人、工藤平助が調べて見ると、赤蝦夷と呼んでいたのはアイヌではなくロシア人と判った。当時、ロシアは大国だったので、ロシアと貿易し北海道を開いて、日本の財政を豊かにするよう幕府に進言した。老中の田沼意次はこの事を聞き入れ、天明5年（1785）、北海道へ探検隊を派遣し調査することになった。



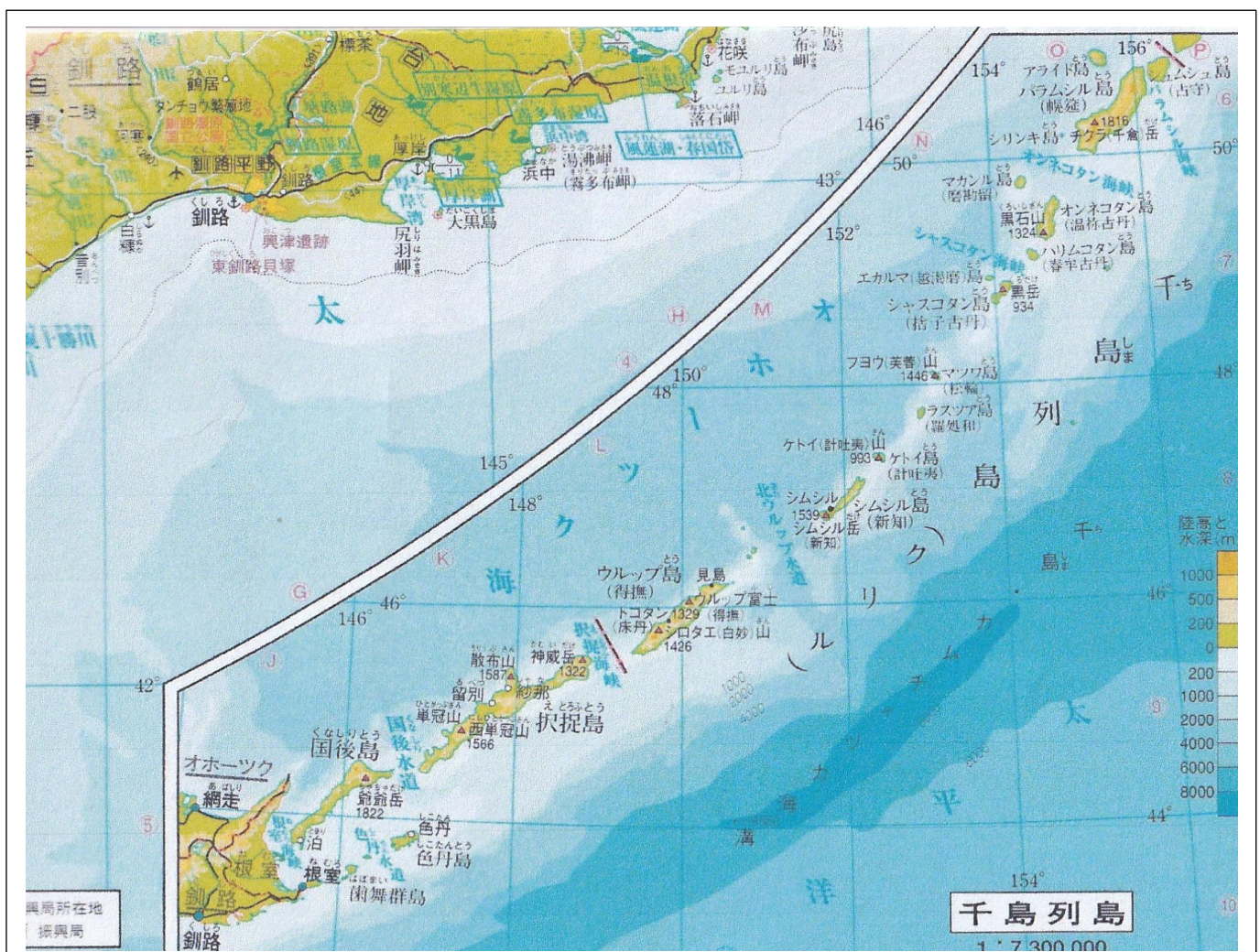
この調査隊には地理学者の**最上徳内**（左：画像）が入っていた。徳内は宝暦4年（1754）羽前国村山郡楯岡（現山形県村山市）の貧農の生まれ。若いときはタバコの行商をし、東北地方を歩き廻り、次第に地理に興味を持ちはじめ、のち江戸に出て**本多利明**の門人となった。利明は当時、名の知られた天文・数学の学者で地理にも詳しい学者であった。そこで、調査隊の一人、**青島俊蔵**からその話を聞いた利明は弟子の徳内も隊員の一人に加えてくれるよう頼み、徳内はメンバーの一員となった。徳内は竿取という測量の手伝いとして採用され熱心な隊員であった。

そして、徳内は俊蔵について国後まで行き、エトロフへ渡ろうとしたが、冬になってしまい、松前まで引き返し、正月24日アイヌの小舟でエトロフに渡った。ところが、エトロフには三人のロシア人が住んでいて、**徳内**は親しくなり、三人が郷里に帰りたいがっていることを知った。そこでこの三人を連れてクナシリへ帰り、松前藩の役人に引き渡し、長崎から本国に帰してもらおうよう頼んだ。徳内は三人から北千島やカムチャッカの様子を聞いて、どうしても行って見たいと思いエトロフのさらに北の端ウルップ島に渡った。しかし人は住んでおらず、その先につらなる島々を望むことができたが、舟が小さくさらに冬が迫っていたのでやむなく引き返した。

江戸に帰ってみると老中の**田沼意次**は失脚、徳内の調査結果もなんら幕府に取り上げられなかった。そこで、今度は単独で出かけたが、松前藩は千島へ渡ることを許可せず、追い返されてしまった。青島俊蔵の家来として松前まで行ったのだが、熱心のあまり規則を破ったとして投獄されてしまった。徳内は牢獄で見聞したことを書き、師匠の本多利明に送った。利明はこの報告を見て幕府に進言した。

松平定信は徳内の学才を知り、牢から出し普請役に、寛政2年（1790）、蝦夷地御救交易御用役にとりたてた。そこで徳内は再び北海道に渡った。かつて徳内がエトロフで三人のロシア人を本国に帰すよう骨を折ってやったとき、ロシア人からロシアの通行手形を貰っていたが投獄中に紛失してしまった。これでカムチャッカまで行けないことが分かったカラフトに渡りアイヌ生活を調べることにした。そこで松前まで戻って見ると、根室にロシア船、エカテリーナ号が入港していることを知った。（エカテリーナ号には伊勢白子の船頭光太夫、小市、磯吉の三人が乗っていたが会うことはなかった。（HP:大黒屋光太夫、帝政ロシア漂流の旅 参照）

重蔵の蝦夷地探検 幕府は寛政10年（1798）、蝦夷地を調査することになり、その先発隊長に命ぜられたのが近藤重蔵（28歳）、その案内役は**最上徳内**（44歳）であった。当時の北海道は西南部の狭い地域を除いて道らしき道はなかった。調査は南海岸を東へ進んだが、重蔵はまず道をつけることが先決だと思い、アイヌ70名を使って最大の難所とされるルベシベツからピタタヌンケ（現在の日高支庁えりも町か）までの間、12kmの道路を造った。7月、重蔵らはエトロフ島の南端のタンネモイに「大日本恵登府」の標柱を建てた。翌寛政11年、沙流川のほとり沙流太に義経北行き伝説の義経神社を建て、一先ず江戸へ帰り報告した。再びエトロフ島開発の命が下り、今度は大きな船でエトロフに渡る必要性をとき認められ、はやくからこの地方との商売をしている高田屋嘉兵衛に頼んだ。重蔵は上陸すると、米や塩、着物、漁具をアイヌに与え17か所の漁場を開いた。4年後の享和3年には漁獲量が13,000石（約350万トン）に達し、一万両の利益に達し島民も豊になっていった。重蔵は島をいくつかに分け村とし名主をおき、アイヌたちを日本風の生活をするよう勧め、名も日本風に改めさせた。享和元年、重蔵は部下をエトロフ島の北のウルップ島に派遣し、住んでいたロシア人を立ち退かせ無人島とし、「天長知久大日本属島」という標柱を建てた。重蔵は享和2年（1802）までエトロフ掛をつとめ、以後5回にわたって毎年エトロフ島に出かけ、アイヌの生活を見、北海道東部の事情に詳しくなった。この間、エトロフのアイヌがキリスト教を信じていることを幕府に進言、幕府は文化元年（1804）、厚岸に国泰寺、日高の様に等樹、胆振の有珠に善光寺建て、アイヌ教化にあたらせた。



重蔵は文化4年（1807）利尻島、石狩地方を探検、神居古潭で遭難。この年、幕府は西蝦夷を幕府の直轄地とした。重蔵は28歳から37歳まで、北海道開発のため尽くした功績により、御書物奉行を12年間勤め、文政5年（1823）「金沢文庫考」を表し、滝川文庫を建てた後、永代小普請人となった。

重蔵の息子、富蔵は親に父親に似ず、学問もせず、武芸にも励まぬ不肖息子であった。それどころか、文政9年（1826）村人を殺す事件があり、このため重蔵は江州（滋賀）大溝藩預かりとなり、悲運にも文政12年（1807）江州で亡くなった。58歳であった。

富蔵は文政10年（1827）八丈島に流され島で暮らしたが、改心し「八丈実記」（72冊）を完成。明治20年（1887）、八丈島三根村で亡くなった。 その1完

参考： 宮本常一著 辺境を歩いた人々 河出新書房

地図：ワールドアトラス 四訂版 帝国書院